

特集

**未来へ繋げ
東京2020五輪レガシー**



TOKYO 2020 Sailing Photography

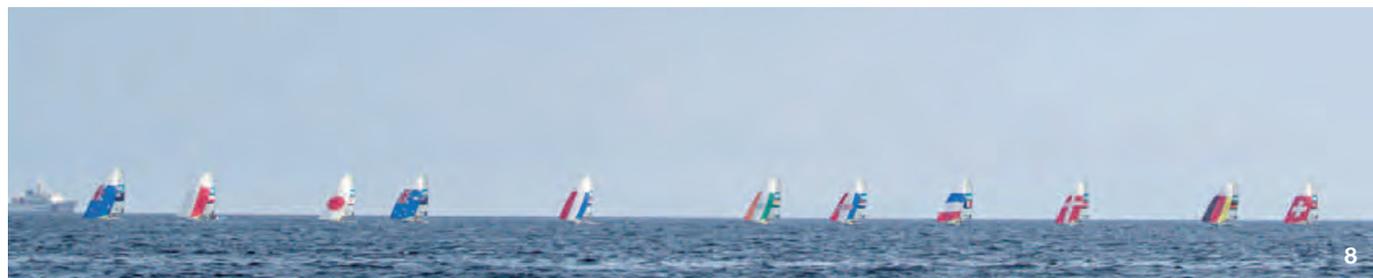
新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより1年遅れで開催された「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」。オリンピック(2021年7月23日～8月8日)は33競技339種目、パラリンピック(8月24日～9月5日)は22競技539種目と、いずれも過去最多の種目数が実施された。そんななか、オリンピック初採用のサーフィン競技では男子の五十嵐カノア選手が銀メダル、女子の都筑有夢路選手が銅メダルを獲得。また10種目が行われたセーリング競技では470級で男子、女子ともに7位入賞を果たした。東京2020大会の熱戦は日本の海洋スポーツにどんな影響を与えたのか。セーリング競技を例に見てみたい。

Photos by Junichi Hirai / BULKHEAD magazine JAPAN





1. 東京2020大会のレース海面は神奈川県江の島沖の相模湾
2. レース終了後メダリスト3人が集い健闘をたたえ合うフィン級
3. ウインドサーフィンのRS:X級もセーリング競技種目
4. 最終レースを終えた女子470級7位入賞の吉田愛・吉岡美帆組
5. 双胴艇のナクラ17級は男女各1名がペアを組むミックス種目
6. セーリング競技最多の44艇が出場した女子レーザーラジアル級
7. 11レースを戦い7位に入賞した男子470級岡田奎樹・外園潤平組
8. 国旗が描かれたセールを揚げてレースをする高速艇の49er級





次世代への継承 江の島ヨットクラブジュニア

江の島で開催された二度目の五輪

東京 2020 オリンピック競技大会のセーリング競技は、2021年7月25日～8月4日に実施された。競技会場となったのは神奈川県藤沢市の江の島ヨットハーバーだ。

江の島ヨットハーバーは前回の東京大会、すなわち1964年のオリンピックでセーリング競技^{*1}を行うために建設された施設で、選手や競技役員を迎え入れるために同年に設立されたのが「江の島ヨットクラブ (EYC)」である。日本を代表するヨットクラブの一つ EYC には、1965年に発足したジュニア部会がある。五輪を機に親交を深めたデンマークのヨットクラブから OP 級^{*2}が寄贈されたことをきっかけに、日本初の本格的なジュニアヨットクラブとして活動を始めた。

1964年大会のレガシーである江の島ヨットハーバーで半世紀以上にわたり活動を続け、これまでに600人以上のセーラーを育成してきた「江の島ヨットクラブジュニア (EYCJ)」。現役のジュニアセーラーたちは昨夏、江の島が再びオリンピック競技会場となったことにどんな刺激を受けたのだろうか？

江の島ヨットハーバーでは2018年から毎年、世界のトップ選手が参加するグレード1^{*3}の国際大会「セーリングワールドカップシリーズ」が開催されてきた。来るオリンピックに向けた準備のため大会に合わせて長期滞在する選手も多く、同じハーバーを利用するジュニアセーラーたちは、海外選手や日本代表選手と一緒に写真を撮つ

たり、ライフジャケットにサインをしてもらったり、「メダリストに金メダルを触らせてもらったこともある！」と、活発に交流していた。

そんな環境もあり EYCJ のメンバーはオリンピックに関心が高く、応援している選手を聞くと「(レーザー級の)南里選手」「(470級の)岡田選手」「(レーザーラジアル級の土居)愛実ちゃん」「オーストラリアのマット」と次々と名前が挙がるほど。しかし新型コロナウイルスの出現で状況が一変した。

2020年に予定されていた国際大会は中止となり、東京2020大会は1年延期、そして無観客に。さらに会場整備のため、大会開始の3か月前には江の島からの一時移転を余儀なくされた。「残念ながらオリンピックの盛り上がりを感じることができませんでした」と話すのは指導者の高宮元人さんだ。「船台の回収など選手の出艇サポートや、間近でレース観戦をできればどれほど子どもたちの刺激になったか」と続ける。

それでもホームポートで開催されるオリンピックの雰



2008年北京五輪レーザー級日本代表の飯島洋一さん(右)もEYCJコーチの一人

困気を少しでも味あわせてあげたいと企画したのが、男子 470 級代表の岡田奎樹選手、外菌潤平選手、男子 RS:X 級代表の富澤慎選手への壮行会だ。感染対策のため屋外で、参加人数をしぼり、花束贈呈だけの短時間のセレモニー。3 選手が所属する企業のコーチである関一人さんが、EYCJ のメンバーであることから実現したささやかな交流だった。

大会期間中は一度だけ遠くからレース観戦をした。どうだった？ とその時の感想を聞くと「速かった！」「470 級のレースで、追い風で日本チームがどんどん抜いていた！」「日本がけっこうすごかった！」と我先に口を開く。遠目で見ただけでこんなに興奮するのだから、観客を入れた開催だったらどんなに良かっただろうか。

出でよ、未来の五輪セーラー

「無観客開催は残念でしたが、子どもたちはこれから徐々に江の島でオリンピックをやったということに目覚めていくのではないのでしょうか」と話すのはジュニア部会長の山下勝さんだ。「そのためには大事なのは継承ですね。ハード面ではセーリングセンター^{*4}が建てられました。ソフト面では EYCJ の先人たちがそうしたように、我われが折に触れて東京 2020 を語り継ぐことでジュニアの記憶も補強されていくと思います」と続けた。

EYCJ の歴史では極端にレース指向に傾いた時期もあった。しかし二度のオリンピックを経て、今こそ原点回帰をするべきではないかと山下さんは考えている。「小沢吉太郎さん^{*5}が設立した当初はヨットに乗るだけでなく海洋教育、カッターボートや水泳で体を鍛えるカリキュラムもあったそうです。同じことはできないとしても、ヨットに乗ると体も鍛えられ、精神も鍛えられ、勉強もがんばれることを体験してもらいたいです。レースに夢中になってもいいし、競わずに海を楽しんでもいいですから」。ジュニアを卒業しても長くヨットを続けて欲しいというのが山下さんをはじめとする関係者の共通の願いだ。

2021 年時点の EYCJ メンバーは小学 2 年生から中学 3 年生まで約 50 人。藤沢市内在住もいれば東京から通うメンバーもいる。親がヨット経験者もいればそうでない子どももいる。ただ特筆すべきは、EYCJ にはオリンピックの保護者がたくさんいることだ。先述の五輪代表コーチ、関さん(アテネ五輪男子 470 級銅メダリスト)も保護者の一人。ほかにも複数おり、コーチとして直接指導



保護者やコーチなどに支えられて活動するジュニアメンバー

してくれたり、質の高いレース運営を仕切ってくれたりしている。

そんな恵まれた環境を知っているのかわからないのか、ハーバー内を駆け回る子どもたちに将来の目標を聞くと「うーんとメダリストになりたい。オリンピックじゃなくても」(55 期生 武田禮)、「来年の全日本に行って、

上位に入って、代表選考にも行って、最後は世界選手権に行けるようにがんばりたい」(53 期生 飯島来海)、「日本代表になって世界選手権へ行行って、世界の選手と語り合ったり戦ったりしたい」(54 期生 武井太陽)、「中学 2 年か 1 年の時に世界選手権で 3 位以内にはいる。今は小学 4 年だけど」(55 期生 松永虎太郎)、「将来の目標はオリンピックに出ること。近い目標は世界選手権に行くこと」(53 期生 畠中紗英)という力強い答えがかえってきた。

実は EYCJ 卒業生のオリンピックは、まだ一人しかいないのだとか。東京 2020 大会のジュニア世代から未来のオリンピックが誕生することを期待しようではないか。



写真提供：EYCJ

EYCJ が企画した代表選手壮行会のコマ



山下勝 江の島ヨットクラブジュニア部会長

*1 セーリング競技。1900 年の第 2 回パリ大会から正式種目となり「ヨット競技」として実施される。2000 年の第 27 回シドニー大会から「セーリング競技」に名称変更された。

*2 OP (オプティミスト) 級。世界中で普及している安定性が高い一人乗りのジュニア用入門艇。

*3 グレード 1 大会。セーリング競技の国際統括団体ワールドセーリングが認定する大会レベル。グレード 1 は参加基準が最も高い。

*4 セーリングセンター。江の島ヨットハーバー内に建設された鉄筋 3 階建ての建物。マストを立てたままディンギーを収納できる艇庫や、レース運営室などが配置されている。

*5 小沢吉太郎。戦前からヨットに親しみ、1952 年ヘルシンキ五輪のセーリング競技団長を務め、1966 年東京五輪ヨット競技の開催準備を指揮するなどセーリング競技発展に尽くした。江の島ヨットクラブジュニアの創始者でもあり、国内に OP 級ヨットを広めた功績から日本の OP 級ヨットの父とも言われる。



オリンピックムーブメントの継承 地方自治体の取組み

セーリング課を設置した神奈川県

東京 2020 大会のセーリング競技開催地が神奈川県藤沢市の江の島ヨットハーバーに決定したのは、開催都市決定の 2 年後となる 2015 年 6 月のことだ。当初、東京大会のセーリング競技は若洲ヨット訓練所（東京都江東区）を拡充して行われる計画だった。しかし、整備コストの高騰による東京都の会場整備計画の見直しや、若洲ヨット訓練所の航空管制権の調整の問題などから代替会場を検討することになり、国内数か所の立候補地のなかから選ばれた。

江の島ヨットハーバーが二度目のオリンピック会場に承認された大きな理由は、ここが 1964 年大会のレガシーであり、それ以降、全日本や国際大会など数多くのヨットレースが開催されてきた実績があるからだ。世界にはオリンピックを複数回開催している都市が東京以外にもあるが、セーリング競技が同じ会場で行われるのは希少とのことである。

2017 年 4 月、神奈川県はスポーツ局内にセーリング課を設置。オリンピック開催に向け大会組織委員会や既存利用者との調整、機運醸成事業などを手がけてきた。セーリング

課が企画し行ってきた機運醸成事業は次のとおりだ。

●セーリング海上体験

江の島ヨットハーバー等において、小・中学生、障がいのある方や親子、一般向けの海上体験会を実施。2016～2019 年度の 4 年間で合計 26 回開催し、のべ 970 人が体験。

●セーリング訪問教室

県内の小学生を対象に選手が競技の魅力を伝え、模型を使ってヨットが走る仕組みを実験するワークショップなどを盛り込んだ訪問教室。2018 年度は 6 校で参加 364 人、2019 年度は 15 校で参加 1,185 人が体験

●レース観戦

江の島沖で開催されるヨットレースを解説付きで海上



フランスチームと県民の交流イベント



葉山町立一色小学校で子どもたちと交流する男子 470 級チーム

写真提供：神奈川県

から観戦し、競技の魅力や迫力を体験するイベント。2018年には1大会で95人、2019年は2大会で4日間計206人が観戦

●セーリングキャラバン

県内各地のイベントにブースを出展し、セーリングワールドカップや東京2020大会などについて周知。2018～2019年度の2年間で県内46か所イベントでブースを出展

●セーリング選手との交流イベント

相模湾で事前練習を行う海外のセーリング競技選手や関係者と、児童・生徒・地域住民との交流イベント。2017～2019年度にかけてアメリカ、ノルウェー、フランス、オーストラリア、香港、スペイン、ドイツ、ニュージーランドなどとの交流イベントを計15回実施

セーリング競技開催に特化した課を設置しオリンピック開催に向けきめ細かい対応を行ってきた神奈川県。県民の関心も高まり手応えを感じていたが、新型コロナウイルスの感染拡大で2020年以降は計画どおりに進まない事業もあった。しかし江の島ヨットハーバーで二度もオリンピックが行われたことは県の大きな財産、まさにレガシーである。

オリンピック競技開催地、神奈川県のアピールポイントの一つとして、県は大会後も継続してセーリング普及に関わる事業を行う予定である。2022年度は県内のヨットハーバーやマリナを拠点としたセーリング海上体験会、江の島ヨットハーバーで開催されるセーリング大会に合わせたイベントを計画し、県内外に向けセーリング県・神奈川の浸透を目指す。

ボランティア組織を発展させた藤沢市

2021年11月27日「東京2020オリンピック競技大会・セーリング競技開催記念モニュメント移設記念式典」が江の島ヨットハーバーにて行われた。ヨットの帆をイメージしたテラコッタのモニュメントは、東京大会のセーリング競技開催を記念し神奈川県が制作したもので、2020年1月から江の島弁天橋の袂に設置され記念写真スポットとして親しまれていた。江の島ヨットハーバーには1964年大会の聖火台が展示されている。2020年大会のモニュメントをその横に移設し展示することで、2回の五輪レガシーを地元藤沢市民や県民に広く知ってもらえることになるわけだ。

式典に先立ち、藤沢市が五輪のレガシーとして新たに立ち上げた「チーム FUJISAWA2020」を通じて集まった

メンバーにより、聖火台とモニュメントの清掃「ピカピカプロジェクト」が行われた。チーム FUJISAWA2020 は藤沢市生涯学習部オリンピック・パラリンピック開催準備室が募集した東京2020大会の「シティキャストフジサワ（主に観光客を迎え入れる地元ボランティア）」が母体となり、大会を契機にボランティア活動をさらに活性化していくという組織だ。シティキャストの募集は2018年から行われ、約1,000人が内定していた。そのうちボランティアリーダーは約100人。定期的に研修をし、2019年にはセーリングワールドカップシリーズ開催に合わせ、江の島周辺や藤沢駅などで案内活動を実行。コロナ禍以降もオンラインを主体とした研修は継続され本番に向けての準備を進めていた。ところが、活動ユニフォームが手元に届き開幕まであと2週間という時に無観客での開催が決定。メンバーたちの落胆ぶりは想像に難くない。ユニフォームを着て活動したい、という熱い思いに応える形で、ハーバーの入り口付近で選手バスを出迎え歓迎するなどの代替活動を市が企画・実施した。

藤沢市では、「チーム FUJISAWA2020」をボランティア情報のプラットフォームとして、既存の団体などと連携しながら、スポーツ、環境、教育、まちづくり、災害、国際交流などさまざまな分野のボランティア募集情報を掲載している。気軽にボランティアに参加できる環境づくりを継続して進めていく予定だ。

ピカピカプロジェクトに参加した佐藤さんは、「定期的にピカピカプロジェクトを行いながら、江の島全体を活性化できればいいとか、フランスの有名な観光地・モンサンミシェルと江の島は共通点が多いので、次のフランス大会に向けて国際交流もできればいいとか、アイデアはいろいろあります」と意気込む。ボランティア活動の火は無観客となっても消えず、新たなステージで再び勢いを増したようだ。

佐藤洋さん



清掃活動に参加したチーム FUJISAWA2020のメンバー



共生社会への取組み パラリンピック競技復活に向けて

ロサンゼルス大会を目指して

人間の可能性とスポーツの奥深さ、そしてアスリートたちの真剣勝負に釘付けになった人も多かった東京 2020 パラリンピック競技大会。カヌーやボートといった水上スポーツが実施されたのに対し、海洋スポーツであるセーリングは競技種目から除外され実施されることはなかった。1996 年のアトランタ大会からデモンストレーション競技に採用され、2000 年シドニー大会から公式種目となり 2016 年のリオ大会まで、5 大会連続で行われてきたパラリンピックでのセーリング競技だが、東京大会だけでなく、次のパリ大会でも実施されないことが決定している。

パラセーリングの世界は身体障がいから視覚障がい、知的障がいまで裾野が広い。また健常者と区別なくレースを行う活動も活発で、インクルージョンスポーツとしても注目されている。セーリング界は今、2028 年ロサンゼルス大会で公式競技復活を目指して活動している。

そもそも、なぜセーリング競技が公式種目から除外されたのか？ 国際パラリンピック委員会 (IPC) は 2015 年の総会で東京 2020 大会の競技種目を採択したが、その時にセーリングと 7 人制ラグビーの 2 競技がはずされることになった。理由はいずれも「世界レベルでの普及が基準に達していなかった」というもの。発表直後からワールドセーリング (WS)^{*1} をはじめ各国で競技復活の署名活動などが行われ、日本からも同年 7 月に日本障害者セー

リング協会がとりまとめた 1 万 3691 名分の署名が、IPC へと提出された経緯がある。

現在、パラリンピックへの復活に向けて国内で中心的に活動を行っているのが、日本セーリング連盟 (JSAF)^{*2} の障がい者セーリング推進委員会だ。ワールドセーリングはすでにロス大会復活に向けたプロモーションを展開しており、2021 年 10 月には SNS で #SailtoLA #BacktheBid のハッシュタグをつけたメッセージを発信するグローバル広報戦略をキックオフしている。また WS では、

- ・2023 年までに 6 大陸 45 개국で競技展開
- ・2023 年までに競技人口のうち 30 歳以下のアスリートの比率を 20%とする



日本からもパラリンピック復活に向けたキャンペーンに参加

・2023年までに競技への女性参加率を30%とする
を戦略的優先事項として推進している。

2022年にパラワールドを開催

一方、WSの加盟団体としてJSAFに課せられた役割はというと「アジアでのパラセーリング活動を“見える化”すること」だと、同会委員長の高間信行さんは言う。日本財団などの助成もあり、日本にはハンザ級という一人または二人乗りでバリアフリーのユニバーサルデザイン艇が全国に300艇超あり、各地での活動も活発に行われている。2018年には観音マリーナ(広島県広島市)で世界22か国から195人が参加したハンザ級のワールド&インターナショナルチャンピオンシップも開催された。

しかし「パラセーラーのクラス分け、世界ランキングへの選手名登録などの遅れが見える化につながっていない要因の一つです」と話すのは、WSパラ委員の萩原ゆきさんだ。国内でのクラス分け体制整備が急務だが、診断する医師が少なく定期的に実施するマンパワーが足りないところにコロナ禍が追い打ちをかけ、2020～2021年に計画されていた活動の多くが中止になったことも響いた。

さらにハンザ級が普及しているからこそその難しさもある。ハンザ級の理念は「Sailing for Everyone(みんなのためのセーリング)」。つまり年齢や性別、障がいのあるなし、あるいは障がいの種類によって区別せず、誰もが一緒に楽しもうというものなのだ。このため、愛好者たちはパラリンピックで行われているクラス分けを経験する機会がなかった。また世界選手権などの情報も少なく、また世界選手権に出場しても、WSにはJSAFからの出場と認識されていなかった。

そこで同委員会は、コロナ禍で活動が制限される間、

クラス分けやJSAF会員登録の問題について議論を重ね、JSAF所属選手としてクラス分けを受けられる体制の整備などを進め、パラリンピックを目指せる環境づくりを進めてきた。そのなかで見えてきたもう一つの課題が選手の育成だ。これまでは主に普及に力を入れてきたため、WSが優先事項としている若手や女性の育成も含め、初心者はどう引き上げていくかは未だ手探りの状態といえる。

明るい見通しもある。大学生など若い世代の意識の変化だ。同委員会には大学ヨット部の学生から「新入生を勧誘する時にSDGsの要素をどこに求めるべきか?」という相談があったのだという。SDGsという観点から見れば、セーリングは非常にポテンシャルの高いスポーツだ。風を動力としたクリーンで環境に配慮した乗り物であること、男女混合種目がオリンピックでも採用されているほど男女格差が少ないこと、障がい者も健常者もともに楽しめる包括的な環境を提供できること、などなど。SDGsは、新たな才能を積極的に呼び込む力強いツールになるといえるだろう。

アジアのリーダー的役割を期待される日本だが、アジア各国ではオリンピックとパラリンピックの統括団体の窓口が一つでないことが多く、活動実態が見えにくいことにも頭を悩ませている。IPCが「地域的な隔たりのあるスポーツ」と見れば、パラリンピック競技への復活は遠のいてしまう。そのことを危惧したアジアセーリング連盟³は、2021年2月にパラセーリング委員会を発足。日本、香港、タイが中心となって各国の実態把握に努めている。また2022年10月には観音マリーナを拠点にハンザ級の「パラワールドセーリング選手権」と「アジアパシフィック選手権」の開催が決定している。

2028年大会の採用競技は2023年1月に決定される。広島で開催される2つの大会がパラリンピックへの復活の布石となるのだろうか。



車椅子セーラーが船に乗り込むためのリフトが設置されたマリーナ



若洲ヨット訓練所で開催された第22回東京都障害者スポーツ大会オープン競技障害者セーリングの参加者たち

写真提供：JSAF 障がい者セーリング推進委員会

体験セーリングを通して普及活動に力を入れる 会員数 170 人のセイラビリティ江の島

国内で普及しているハンザ級は、1999年にオーストラリアから日本へと紹介された。船体重心が低く重いため転覆の心配がなく、前向きに座ったまま、舵と連動したジョイスティックを操るだけでセーリングできるバリアフリーのヨットだ。1999年8月には100人以上の障がい者スポーツの関係者が参加し、日本初の体験会が大阪北港マリーナ（大阪府大阪市）で行われている。

ハンザ級は誰でもセーリングを楽しめる手軽さが魅力で、2002年にはセイラビリティジャパンが設立され、翌年にはセイラビリティ湘南が立ち上がり江の島での体験会もスタートした。しかし体験会を継続して行うにはインストラクターが必要だ。そこで活動の恒久化と発展のため2003年からインストラクター養成講座が始まり、2004年には1964年の東京五輪セーリング競技に選手として出場した松本富士也氏が中心となって「セイラビリティ江の島」を発足。2006年にはNPO法人化し、現在に至っている。

誰もがセーリングを楽しめるようにという理念から活動を続けるセイラビリティ江の島は、江の島ヨット

ハーバーを拠点に①セーリング体験②インストラクター養成を中心に活発に活動を行っている。

年間の活動日数は約100日。セーリング体験の対象も、子どもから高齢者、そして障がい者と幅広い。セーリング体験でヨットの魅力に開眼し、インストラクターになる人もたくさんいる。インストラクターの一人、曾根陽子さんは琵琶湖でのセーリング体験がきっかけでヨットに夢中になり、アテネパラリンピックにも参加。江の島だけでなく、東京や関西などでもセーリングを楽しむなど実にアクティブなセーラーだ。

この2年はコロナ禍で活動の自粛を強いられたが、2019年時点の会員数は18～87歳まで176人（うち女性42人）と、国内最大規模のセイラビリティ団体となった。自粛期間中には豊富な人材の力を借り体系的な活動マニュアルを制作。コロナ後に向けた準備は万端である。



アテネパラリンピックに参加した経験を持つ曾根陽子さん



活動自粛のコロナ禍中に作成したマニュアル



2021年12月にセイラビリティ江の島の活動に参加した皆さん

*1 ワールドセーリング（World Sailing）。セーリングを統括する国際競技団体。IYRU（International Yacht Racing Union）、ISAF（International Sailing Federation）を経て現名称に。本部はイギリス。世界145か国・地域の競技団体が登録しており、日本からは日本セーリング連盟（JSAF）が加盟している。

*2 日本セーリング連盟（Japan Sailing Federation）。日本国内のセーリ

ングを統括する競技団体。日本ヨット協会と日本外洋帆走協会が統合し1999年に発足した。都道府県ヨット連盟や地域別外洋団体、艇種別団体など139団体が加盟している。

*3 アジアセーリング連盟（Asian Sailing Federation）。WSの下部組織でアジア地区を統括する。本部はシンガポール。32か国・地域が加盟している。